

収蔵資料のウェブ公開

すずき さとし
鈴木 聡 (学芸員)

博物館が公開するさまざまな資料データベース

博物館に収蔵されている資料の公開は、近年さまざまな形で進められています。当館では、学習用に作られた「電子百科」のほか、「砂の自然史」「箱根火山起源テフラデータベース」などを公開しています。また、国立科学博物館のウェブサイトで公開されている「魚類写真資料データベース」のほか、GBIF（地球規模生物多様性情報機構）やS-Net（サイエンスミュージアムネット）にデータを提供することで、他機関の資料とともに外部のウェブサイトで公開されています。

このように当館の収蔵資料はさまざまな形のデータベースで公開されていますが、これまで生物から地学まで当館が収蔵する自然史の全分野にわたる資料を俯瞰できるような公開データベースはありませんでした。昨年10月から当館の多様な収蔵資料の情報を検索・閲覧できる「収蔵資料データベース」（図1）の公開を開始しましたので、紹介します。

収蔵資料を公開する意味

博物館が資料データベースを公開することには、博物館にとっても利用者にとってもさまざまなメリットがあると考えられます。最大のメリットは、博物館資料へのアクセスが容易になることでしょう。博物館の収蔵資料は、収集した学芸員により調査研究や教育普及などに用いられる以外にも、他館の学芸員や大学の研究者、学校関係者など館外の利用者によってさまざまな目的で利用されています。館外の利用者は、どのようにして当館の資料について知るのでしょうか？

当館のウェブサイトでは、学芸員の専門分野やメールアドレスが公開されているため、資料の担当者に問い合わせが来ることがあります。あらかじめ利用したい資料が当館にあるかどうかという情報を持たずに、連絡をいただく場合もありますが、何らかのきっかけで資料の存在を知っていて、連絡をいただく場合もあります。次の(1)～(3)はその例です。

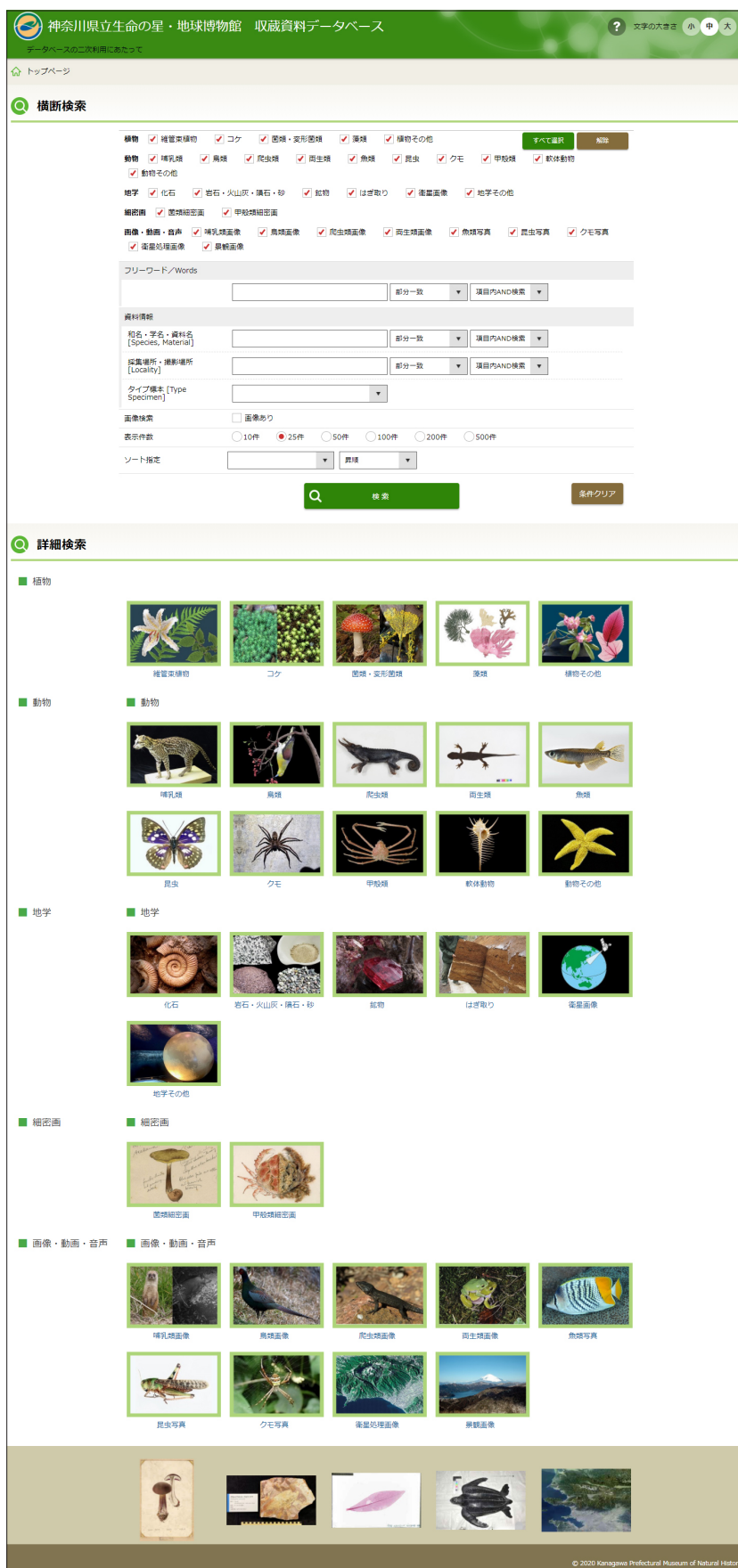


図1. 「収蔵資料データベース」のトップページ (<http://nh.kanagawa-museum.jp/kpmnh-collections/>). 分野をまたいだ横断検索と分野ごとの詳細検索ができる。

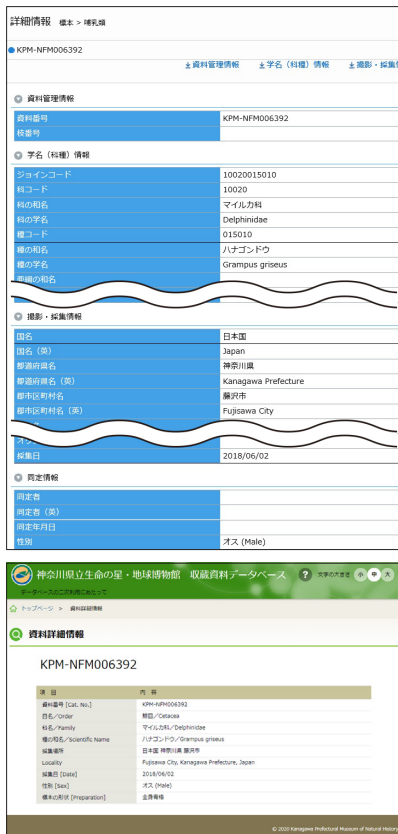


図2. 電子台帳(上)とそれに対応する公開ページ(下: KPM-NFM 6392 ハナゴンドウの例)。

(1) 展示を見て知る

博物館の資料には、普段から常設展で展示されているもののほか、普段はバックヤードで保管されていて特別展等に期間限定で展示される資料があります。また、他の博物館に貸し出されて、そこで展示されることもあります。展示されている資料を見て、「当館の特別展でもこの資料を展示したい」ということもあるでしょう。

(2) 論文や報告書等で知る

当館の資料を使った研究論文や報告書には、資料名と資料番号の記載があります。それらをもとに特定した資料の利用についての問い合わせもあります。

(3) データベースで知る

本稿のはじめに紹介したように、当館の資料に関するデータベースは以前からありましたが、それらのデータベースを閲覧し、そこで知った資料が利用されることも多くあります。例えば、2001年から公開している魚類写真資料データベースに掲載されている画像や標本は、学術研究や教育目的で盛んに利用されています。

現時点では「収蔵資料データベース」のみで公開されている資料もあるため、

このデータベースの閲覧者数が増えれば、新たな利用形態が生まれる可能性があります。

収蔵資料データベースの特徴

当館の収蔵資料は電子台帳で管理されています。電子台帳には、資料の採集場所、採集年月日、採集者などさまざまな項目が入力されています(図2)。「収蔵資料データベース」では、電子台帳の一部のデータをそのまま公開しています。特定の利用者を想定して図鑑のような役割を持たせている「電子百科」などとは、この点で異なっています。また、電子台帳に登録・更新されたデータがすぐにウェブサイトに反映されるのが、このデータベースの特徴です(一部の資料を除く)。

2021年2月3日現在、全収蔵資料の9割近い793,434件のデータを公開しており、横断検索では全分野の資料を一括で検索できます。検索項目は、「和名・学名・資料名」「採集場所・撮影場所」「タイプ標本」の3項目です。「タイプ標本」で「指定有り」を選択すれば、当館が所蔵するタイプ標本(生物の新種を発表するとき指定された基準となる標本)が一括で検索できます。詳細検索では、分野ごとに資料を検索できます。各分野で電子台帳に登録する項目や重要とされる情報が異なるため、検索項目は分野ごとに異なっ

ています。アーカイブズ(画像・音声・動画)や標本の画像も公開しており、一部の画像は拡大して見るができます。例えば、地学分野のはぎ取り標本の画像には、拡大して見ることでできるものが多いです(図3)。

博物館活動を映す鏡としてのデータベース

私たち学芸員の仕事は、集める(資料収集)、調べる(調査・研究)、伝える(教育・普及)の3本柱で構成されます。資料収集は残りの2つの活動に繋がる博物館の根幹的な活動と言えます。「収蔵資料データベース」は、資料収集活動の成果を館内外の誰でも見ることができるシステムです。世間一般的に博物館といえば展示の印象が強いですが、展示資料は収蔵資料全体のほんの一部にすぎません。多くの資料は普段バックヤードにあり、展示(期間限定の特別展や展示替え)のほか研究や講座などで活用されています。「収蔵資料データベース」では、展示されている資料以外のバックヤードにある資料のデータも閲覧できます。各分野の学芸員がどのような資料を集めているのか、その傾向を知ることによって学芸員の活動の様子を垣間見ることができます。データベースから、博物館のことをより深く知ることができるのです。



図3. 高精細画像表示により拡大して見ることが可能な画像資料(KPM-NP 41 露頭はぎ取り標本の例)。